

# 御殿堰 大黒天便り



## ◆第九号◆

山形市中心市街地を流れる御殿堰。その豊かな水の流れを見守っているのが私「御殿堰大黒天」です。



「大黒天便り」では、わたし大黒天が御殿堰の歴史・季節の話題・生活の知恵など『なるほど！』と読んでいただける内容をお伝えしていきたいと思っています。今回は第九号です。

## ◆端午の節句つるし飾り◆

二月二日（3月21日）に展示した「つるし雛」に続き、四月三日（5月22日）には「端午の節句つるし飾り」の展示をしています。水の町屋の軒下に「すだれ」のように架け風に揺れるその様は、まるで水中を元気に泳ぎまわる鯉のようです。

柳の新芽の緑も美しい御殿堰。

街中での季節感を感じに是非足をお運びください。



## いんねがつす

季節毎の「ほう？」「いんねがつす」な話をさせていただきたいと思っています。様々なウンチク・四方山話をネタに、日本文化・山形文化の素敵な所を皆さんで共有していきたいでしょう。

（こちらのコーナーでは御殿堰にて皆様をお待ちしている各店舗御主人にご協力いただき作成していきます）

四月七日にオープンした『布四季庵』布四季庵では、米沢織の着物及び婦人服・ストール等の商品や米沢牛・米沢鯉などを始めとする米沢の物産販売もしています。今月は、江戸時代から続く米沢織についてご説明致します。

## 『米沢織物』

米沢は、日本国内の繊維産地の中で最北の産地。織物の素材は、青苧に始まり、絹・人絹・化学繊維と推移してきました。現在は、天然繊維と化学繊維の総合産地となっています。

江戸時代の初め、米沢ではすでに漆・桑・からむし・苧麻・紅花などが栽培されていました。上杉氏が米沢に入部した一六〇一年、上杉景勝の重臣直江兼続は、城下町の整備を行う一方で、これらの特産物を引き続き奨励し、藩の買上制としました。後の藩の専売制の始まりとなりました。青苧からむしから取りだした繊維は、初め南部藩に売り出され、後に藩の主要な特産物として奈良晒や越後縮の原料として、織物産地に売られていきました。第九代米沢藩主上杉鷹山の産業開発により、一七七六年に越後から縮師を迎えて、縮役場を設け、織り方を家中の女子に習得させ、織りだされたのは青苧を原料とする麻織物でした。これが、米沢機業の始めといわれています。

鷹山の藩政改革により、桑の栽培と養蚕が盛んになると、織物は麻織物から麻絹交織、そして絹織物へと移行していきます。安永以来、約四〇年間の歳月を必要としたのです。真綿を原料にした紬織物は、米沢紬、長井紬、白鷹紬と呼ばれ、のちに統一され、伝統的な置賜紬に発展してきます。明治に入り、化学染料による染色方法が普及し、力織機の改良開発が行われます。米沢織物の海外向け製造も始まり、主にインド・アメリカに輸出されました。これが米沢織物輸出の土台となり、戦後海外展示会開催も行われるなど伝統となっていきます。

一九一七年・一九一九年の米沢大火が力織機への転換を促進しさらに近代化が進みます。現在、全国で第一位のシェアを占める袴地の生産は大正時代から頭角を現します。良品を出す為の人々の努力によって、米沢織物は綿々と現在に至っています。

一九一五年、米沢高等工業学校（現・山形大学工学部）教授秦逸三の研究により日本で初めて人造絹糸が発明され製造が始まりました。米沢では、全国に率先して人絹応用の織物の研究開発が進み人絹糸は高く評価されます。人絹及び人絹交織を主流とした米沢織物産地も、戦時統制下で軍需品優先の生産体制が取られます。

戦後の洋装化に伴い、合成繊維織物等の新品種の開発や仕上げ加工技術の進歩に対応して、米沢織物の婦人服地の産地の新分野を確立していきま。絹をはじめとして化学繊維まであらゆる種類の糸を組み合わせた手の込んだ製品を作り上げます。

現在は、高級婦人生地として海外有名ブランドにも使用されています。また、呉服の高級化志向により品質の向上、商品開発が進みます。紅花染をはじめ草木染等の新商品が生まれました。技術の伝承や、新しい衣生活の提案など米沢織物のさらなる可能性への挑戦は、



## 山形あれこれ

### ⑦やまがた舞子

山形県を南北に流れる最上川は、紅花商人の昔から京・大阪との交易を盛んにし、その文化を本県にもたらしました。とりわけ、県都山形市は、政治・経済・文化の中心として独自の地域文化を育み現代に伝えていきます。また最近では、高速交通網の整備により、県内外から多くの人々が本市を訪れ、経済や文化の交流が年々盛んになっていきます。

山形には長い歴史を刻んできた素晴らしい伝統芸能が、今も数多く伝承されておりなかでも山形芸妓は、当地を代表する伝統的な芸能を保持し、その優れた技能から全国的にも高い評価を得ています。しかし、最盛期の正和から昭和初期には一五〇名を数えた山形芸妓も、時代の変遷とともに減少し、現在では一〇数名となり深刻な後継者不足に悩まされています。

平成八年二月に山形商工会議所や山形市観光協会が中心となり、山形市内企業の出資により、伝統芸能後継者育成のため「山形伝統芸能振興株式会社」愛称：やまがた紅の会」が設立されました。そして、現在は、試験で選ばれた若いやまがた舞子が伝統芸能後継者として、踊りや唄・三味線などの特訓を受けながらお座敷に出て活躍しています。

先月五日には、「やまがた舞子」八期生入社式が行われました。やまがた舞子は、新入社員三人を含めて七人。新入社員三人は三月から日本舞踊や礼儀作法、着付けなどの研修に入っており、六月一日にお披露目が予定されています。



次号の発行は六月七日です。来月も皆様と紙面でお会いできるのを楽しみにしています。